

〔研究紹介〕

教育における臨床の知の獲得をめざして

－現職教員院生の挑戦－

教育学専攻

指導教員 助川 晃洋

修士課程1年 今井 智史

2024年度大学院修士課程の助川ゼミ（教育方法学研究室）では、2021年度以来となる歴代二人目の日本人1名を新メンバーに迎えた。当人の研究テーマは、すでに他大学で臨床心理学のMaster's Degreeを取得済みであり、また本学入学直前まで小学校の教壇に立っていたという自身のキャリアに基づいて設定されており、現場で生じている切実な課題に向き合い、その解決に貢献しようとする姿勢がはっきりと見て取れる。下掲の通りである。

* * * * *

今井智史 小学校教員の心理的ストレスとコーピングに関する実証的研究

文部科学省が公表している各種統計調査の結果によると、精神疾患に起因する小学校教員の病気休職件数が、近年急速に増加している。各教科等の授業や学級経営といった通常業務のみならず、頻発する児童の問題行動や保護者・地域から寄せられる要望への対応など、仕事が広範囲かつ長時間にわたり、また常に高度な判断を求められるため、多くの教師が、心理的にストレスフルな状態に置かれている。上記のストレッサーに加えて、職場の新たな人間関係や不慣れな物的環境に適応するための努力をしなければならないとすれば、その傾向は、一層顕著であろうと予想される。

そこで本研究では、東京都の公立小学校に勤務する新任（卒）及び（経験年数の長短にかかわらず）異動1年目の教員を対象として質問紙調査を行い、学校におけるストレスの原因と自己認知の実態を把握した上で、その軽減や克服に向けた具体的なスキルを開発するとともに、いくつかの特徴的な事例に即して、当事

者へのインタビューや面接を織り交ぜながら、効果を質的に検証したい。こうした作業を経ることで、教員のメンタルヘルスの改善とウェルビーイングの実現につながる学術的・方法的な知見を生み出すことができると考えている。

浅田匡・生田孝至・藤岡完治編著『成長する教師 教師学への誘い』金子書房、1998年

井上麻紀『教師の心が折れるとき 教員のメンタルヘルス 実態と予防・対処法』大月書店、2015年

岡東壽隆・鈴木邦治『教師の勤務構造とメンタル・ヘルス』多賀出版、1997年

落合美貴子『バーンアウトのエスノグラフィー 教師・精神科看護師の疲弊』ミネルヴァ書房、2009年

酒井麻紀子・窪田由紀「小学校教師の職場における援助要請に関連する要因の検討－被援助志向性、問題に対する内的な帰属、協働的風土に着目して－」『教育心理学研究』第67巻第4号、日本教育心理学会、2019年12月、pp.236-251.

関山徹「小学校教師における心理的ストレス過程」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第60巻、鹿児島大学教育学部、2009年3月、pp.309-319.

曾山いづみ「新任小学校教師の経験過程－1年間の継時的インタビューを通して－」『教育心理学研究』第62巻第4号、日本教育心理学会、2014年12月、pp.305-321.

高野七良見・川俣理恵・河村茂雄「小学校教師が感じる新任時の困難の質的特徴－経験2年目までの教師を対象とした面接調査から－」『学校メンタルヘルス』第25巻第1号、日本学校メンタルヘルス学会、2022年7月、pp.76-88.

徳舛克幸「若手小学校教師の実践共同体への参加の軌跡」『教育心理学研究』第55巻第1号、日本教育心理学会、2007年3月、pp.34-47.

日本学校メンタルヘルス学会編『学校メンタルヘルスハンドブック』大修館書店、2017年

服部紀代『教師のウェルビーイングを創出するメンタルヘルスケア』晃洋書房、2024年

松永美希・中村菜々子・三浦正江・原田ゆきの「新任教師のリアリティ・ショック要因尺度の作成」『心理学研究』第88巻第4号、日本心理学会、2017年10月、pp.337-347.

椋田容世・小野圭司「若手教師のメンタルヘルスのための実践的取り組みの検討－教員メンタルサポートプログラム－」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第13号、埼玉大学教育学部、2014年3月、pp.77-83.

村上慎一・丹羽誠・荒木武徳「初任教員のストレス及びその対処法と、メンタルヘルスとのかかわりに関する調査結果」『愛知県総合教育センター研究紀要』

第97集、愛知県総合教育センター、2008年3月、pp.1-42.
諸富祥彦『教師の悩みとメンタルヘルス』図書文化、2009年

* * * * *

様々な教育問題が噴出する中で、それへの対処を期待して、臨床教育学という分野が注目されるようになって久しい。その使命は、「何らかの意味で教育の『現場』に出現する各種の問題現象あるいは問題をかかえる個人やグループへの対応という現実的、実践的な課題やその要請に応えること」^{*1}にある。また臨床教育学には、「現場に根ざす」^{*2}という意識が十分であったとは言い難い、かつての思弁的、空中戦的な教育学への批判が含意されており、それを受けとめた上で、「従来の教育学研究の欠陥を反省的に乗り越える」^{*3}、すなわち学問としてのあり方を模索するための試みであると考えられる^{*4}。では「『新しい教育学の創造』と『問題への対処』をいかにして同時達成するか」^{*5}。研究と実践の両方で、これまでクリニカルな取り組みを積み重ねてきた今井氏によって、この問いに対する回答のモデルケースが提示されることを大いに期待したい。

*1 新堀通也『教育病理への挑戦 臨床教育学入門』教育開発研究所、1996年、p. 8.

*2 志水宏吉「臨床的学校社会学の可能性」『教育社会学研究』第59集、日本教育社会学会、1996年10月、pp. 55-67.

*3 増渕幸男「討論のまとめ」『教育学研究』第64巻第1号、日本教育学会、1997年3月、p. 56.

*4 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波書店、1992年

矢野智司・桑原知子編『臨床の知 臨床心理学と教育人間学からの問い』創元社、2010年

鷺田清一『「聴く」ことの力 臨床哲学試論』TBSブリタニカ、1999年

*5 酒井朗「臨床教育学構想の批判的検討とエスノグラフィーの可能性ー『新しい教育学の創造』と『問題への対処』をいかにして同時達成するかー」『教育学研究』第69巻第3号、日本教育学会、2002年9月、pp. 322-332.

参考文献

- 今井康雄「教育学の暗き側面？－教育実践の不透明性について－」『研究室紀要』第 27 号、東京大学大学院教育学研究科教育学研究室、2001 年 6 月、pp.1-13.
- 内田良『教育現場を「臨床」する 学校のリアルと幻想』慶應義塾大学出版会、2023 年
- 河合隼雄『臨床教育学入門』岩波書店、1995 年
- 佐々木正昭編著『入門 臨床教育学 課題を抱える子ども・親・教師への支援』学事出版、2013 年
- 庄井良信『癒やしと励ましの臨床教育学』かもがわ出版、2002 年
- 皇紀夫「臨床教育学の展開－臨床教育学の方法論的課題－」『京都大学教育学部紀要』第 40 号、京都大学教育学部、1994 年 3 月、pp.110-129.
- 皇紀夫『臨床教育学三十年 その歩みといま』ミネルヴァ書房、2018 年
- 辻敦子「若手教師の資質形成過程についての臨床心理学的研究－奈良女子大学附属小学校『奈良の学習法』の継承－」『教育システム研究』第 10 号、奈良女子大学教育システム研究開発センター、2014 年 9 月、pp.41-49.
- 毛利猛『臨床教育学への視座』ナカニシヤ出版、2006 年
- 和田修二・皇紀夫編著『臨床教育学』アカデミア出版会、1996 年

執筆分担

アステリスクが並ぶ二つの行に挟まれた部分は、今井が準備した草稿に助川が加除修正を施した上で、相互にチェックを重ねて完成させたものである。その前後はすべて助川の単独による。

〔研究紹介〕

平安散文作品の「心惑ひ」と「心掟」

— 『夜の寝覚』を中心に —

人文科学研究科人文科学専攻

修士2年 鈴木 健太郎

1、研究の背景

平安時代後期の物語の『夜の寝覚』は、これまで、心理描写が評価されてきた一面があると言って良いだろう。それは、先行研究での取り上げられ方にもわかることである。

しかし、近年ではそもそも『夜の寝覚』の研究自体が、数を減らしており、もはや心理描写に目を向けることなど少ない。『夜の寝覚』の心理描写を評価する要因として、その描写の長さが取り上げられることが多い。確かに、第一部の男君、第二部以降の女君の長大な心理描写は、登場人物の心理を事細かく表現するものと考えることができるが^{*1}、単に長さだけに目を向けて描写を評価していることは一度見直すべきではないだろうか。小西甚一氏^{*2}も、『夜の寝覚』が「心理小説」とされることに疑問を持っており、何か一つの作品を「心理小説」とするには、「心理描写の量よりもむしろ質に存する」とし、「心理小説とは、けっして作中人物の心理が多く描かれているだけの小説ではない」と述べている。小西氏の述べる、「心理小説」の定義が、「心理描写の評価される小説」といった意味を内包しているのかは疑問であるが、少なくとも、『夜の寝覚』の心理描写の評価においてその長さを一つの要因にしていることに対して疑いの目を持っているのは確かだと思われる。このような見方は遅くとも1971年には存在していた。しかし、『夜の寝覚』の心理描写の質の研究は、現在まで、多少はされているとい

*1 志水富夫氏『『夜の寝覚』の心理描写について—女主人公「中の君」の場合—』（『文学研究（3）』聖徳大学短期大学部国語国文学会 編 1987年12月）や、同氏『『夜の寝覚』の心理描写について—男主人公「中納言」の場合—』（『文学研究』（4）聖徳大学短期大学部国語国文学会 編 1988年12月）などの研究がある。

*2 小西甚一氏「源氏物語の心理描写」（『源氏物語講座 第7巻（表現・文体・語法）』有精堂出版 1971年）

えるが、未だ研究の余地を残しているのではないか。

2、研究の方向性

上記の研究の背景を踏まえて、現在執筆中の修士論文では、もう一度『夜の寢覚』の心理描写、登場人物たちの「心」に目を向ける。具体的には、心の動き・動揺を表すとされる「心惑ひ」、心の持ち方や配慮を表すとされる「心掟」の2語の用例分析から、考察を試みる。地の文でも登場人物の心内語でも、「心」に言及している部分を取り上げるため、前述の2つの名詞を選んだ。2つの語が登場している部分を分析することによって、登場人物の「心」の動き・持ち方等の考察に繋がり、部分的といえども作品の心理描写の質の見直しになるからである。また、「心惑ひ」、「心掟」の2語は、先行研究が非常に少ないからである。このように、『夜の寢覚』の心理描写の分析を進めていくと同時に、他の平安時代の散文作品の用例も同時に見ていくことによって、平安散文作品において「心惑ひ」と「心掟」という、言葉がどのように使われているのかについても検討する計画である。

〔研究紹介〕

『夜の寝覚め』の研究

—女房の行動を中心に—

人文科学専攻・文学文化論コース

修士課程1年 相磯 詩音乃

1、研究の背景

平安中期に成立し菅原孝標^{むすめ}の女の作と伝わる『夜の寝覚め』は、女主人公と男主人公の義兄妹間の悲恋を中心に女主人公の数奇な運命を描いている。大槻福子氏は、「『夜の寝覚め』に関しては、周知の通り、中間・末尾に相当量の脱落部分が存在するものの、近年になって、欠巻部分に関する存在が次々と明らかにされたことにより、個々の資料の一からの解釈、さらにそれを踏まえた上での、従来の欠巻部分復元内容についての見直し、ひいては物語の王道・構造についての再検討等が求められる段階を迎えたといえよう。」と『夜の寝覚め』の研究史についてまとめている。また、本文の中間・末尾に欠陥部分があることから、作品の内容の推定に限界が生じ、その結果、女主人公の女性として、母としての心情変化に注目した心理描写の考察が進められた。現在、心情変化や心の葛藤を読み取るのが研究の主流である。

2、研究の方向性

『夜の寝覚め』は女主人公や男主人公の心内描写に優れているが、前半の巻一・巻二では、ほとんど女主人公の発言や心内語が見られない。女主人公の代わりに、活躍するのが女主人公に仕えている女房の対^{たい}の君^{きみ}である。対の君は、女君の世話を頼まれた人物として、前半部を中心に活躍をする人物であるが、その働きを評価されるばかりで、対の君自身の発言、和歌についての考察は少ない。そのような中で、中古文学の物語で女性を主人公とするものについて、登場する女房が、本文中で活躍すると、女房の女主人公化という動きが起きる。この女房の女主人

公化が指摘されるなかで、『夜の寝覚』に登場する対の君は本当に女主人公化をしていると言えるのであろうか。本文を読んでもみると、対の君は女君の代わりとして行動も発言も多いが、心内語が少ない。女主人公化すると言うには、女房自身の心情描写が存在し、心情の変化がみられなくてはいけないのではないだろうか。

なお、『夜の寝覚』に限らず中古文学には、様々な女房が登場する。宮廷に住み込み、天皇や后に仕える女房や、個人邸に住み込んだり通ったりしながら、貴族に使える女房など様々な立場の女房が存在する。本研究では『夜の寝覚』の対の君と同じように女性貴族に仕え、主人の生活を支える『源氏物語』や『落窪物語』、『狭衣物語』に登場する女房を比較し、『夜の寝覚』の対の君の心内語の量的調査、質的調査を行い、対の君は女主人公化しているのかという点が明らかにすることをめざす。

参考文献

鈴木一雄『夜の寝覚 新編古典文学全集 28』小学館、1996

田淵句美子『女房文学史論』、岩波書店、2019

福家俊幸『紫式部 女房たちの宮廷生活』、平凡新書、2023

大槻福子『『夜の寝覚』の構造と方法【平安後期から中世への展開】』、笠間書院、2011

千野裕子『女房たちの王朝物語論「うつほ物語」「源氏物語」「狭衣物語」』、青土社、2017